

ジョーの涙

尾 島 信 之

奨励者紹介〔おじま・のぶゆき〕

日本キリスト教団南大阪教会牧師

日本キリスト教団南大阪教会附属南大阪幼稚園理事長

ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

（マタイによる福音書 22章34—40節）

今年のNHK大河ドラマ

私の連れ合いの実家が京都にありまして、今年のお正月も京都で過ごしました。1月3日、箱根駅伝が終わり、繁華街へと出かけて行くことになりました。

京都市役所の前から、御池通を跨いで寺町通に入ると、一際人だかりのできている場所がありました。「何があるのかなあ」と覗き込んでみたら、そこは本能寺でした。お正月ですから初詣に来られる方が多いのだらうと思っていたところ、私の後ろから同じように覗き込んでいた人が「今年の大河ドラマだからね」と言っていました。

「今年の大河ドラマだからね」。今年 of NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公は、戦国時代から安土桃山時代にかけて活躍した武将・明智光秀です。明智光秀の生涯のクライマックスと言えば、彼の主君である織田信長を自害に追い込んだ「本能寺の変」が挙げられます。その年放映される大河ドラマのゆかりの場所に、多くの人々が訪れるということは、まああることのようにです。かくいう私も、期せずして、大河ドラマゆかりの場所を何箇所か訪ねたことがあるのですが、その中でもここ母校・同志社大学がゆかりの場所となったことは、感慨深いものがあります。

2013年の

NHK大河ドラマ

今から7年前、2013年のNHK大河ドラマは「八重の桜」でした。主人公は八重という幕末から明治、大正、昭和初期を生き抜いた女性です。物語は大きく分けて二つ、前半の江戸時代の砲術師範の家に生まれ、戊辰戦争で銃を担ぎ、鶴ヶ城に籠城して政府軍と戦った会津編と、後半の新島襄と結婚し、キリスト教主義学校である同志社の設立と運営に奔走する京都編とで構成されていました。

とりわけ、後半の京都編は物語の要所要所で、聖書の言葉が出てきました。たとえば、八重が聖書を読み

始めたばかりの頃、マタイによる福音書5章に出てくる「悲しむ人々は、幸いである」という言葉に触れて、戊辰戦争に敗れた我が身を重ね合わせながら、「悲しむ人々は、幸いであるはずがない」と憤ったり、ルカによる福音書6章の「あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい」との言葉に「耶蘇の神様は臆病者だ」と率直に感じたことを述べたりしています。

隣人を自分のように

愛しなさい

そして、マタイによる福音書22章も、このドラマの中に出てきた聖書箇所です。イエスさまはこの箇所では、愛についての掟を語っておられます。まず「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」(37節)と最も重要な第一の掟を示された上で、それと同列に大切なこととして「隣人を自分のように愛しなさい」(39節)と続けられました。つまり、イエスさまが語られた「愛」とは「隣人を思いやり大切にする事」、もう少し掘り下げて言うならば「自己犠牲」が主眼に置かれています。

しかしながら、イエスさまがそう言われても、私たちは隣人との関係の中で、「自分自身と隣人を同じように大切にすること、隣人のために自分自身を捧げて仕えるということが出来るだろうか」とその困難さを覚えるのではないのでしょうか。

むしろ、意識しているか否かにかかわらず、私たちは自分の人生を豊かにするために隣人を利用する、という側面が強いと言わざるを得ません。私たちは、多かれ少なかれ、自分中心に人間関係を結び、自分のために隣人を利用しながら歩んでいる、という側面を否定することができません。

そして、そのような人間関係は当然、曖昧で希薄なものになってしまいます。特に現代社会においては、この傾向が強いと言えるかもしれません。現代社会は、地縁、血縁で密接に結びついて濃密な人間関係によって形成された「共同体」が崩壊して、個人が独立して、利害関係によって人々が結び合う「集合体」のようなものになっています。そのことの善し悪しは別として、そこでは、損得のバランスによって人と人の関係が保たれ、自分の欲求を満たしたいという理由で、人と人との関係が結ばれかねません。

ともすれば、「献身」よりも「損得勘定」を優先してしまう私たちに対して、イエスさまは、相応しい隣人との関係として「隣人を自分のように愛しなさい」と語られました。

ジョーの涙

この「隣人を自分のように愛しなさい」がモチーフとなった場面が「八重の桜」(第37回「過激な転校生」)に出てまいりました。

同志社大学の前身である同志社英学校が設立された翌年、熊本洋学校でアメリカ人教師から学び影響を受けクリスチャンとなった学生約40名、結束の強さから「熊本バンド」と呼ばれるようになるのですが、この人たちが同志社に編入学してきました。

ところが、もともと同志社で学んでいた在校生たちよりも、熊本からやって来た転校生たちの方がレベルの高い教育をすでに受けていて、熊本バンドの学生たちは当初、同志社の教育に物足りなさを感じていました。そこである朝、校長である新島襄に対して、学校改革の要求を突き付けてきました。その内容は「生徒の能力を甲乙に分け、甲を上級科、乙を普通科の二つに分ける。授業内容見直しを早急に行う。寮内では禁酒

禁煙、門限を定め、罰則を設ける。成績不振、進歩なき者は退学とする。新島襄氏を学校長から解任し、西洋人宣教師を新たに学校長とする」で、これが認められなければ退学も辞さないというものでした。

それに対して、新島襄は次のように答えました。「授業の見直しは早急にしなければならないと思っています。しかし、成績を理由にした退学は認めません。私が目指す学校は、学問を教えるだけでなく、心を育てる学校です。私は日本のために奉仕することができ、国を愛する人間を作りたくて、この学校を作りました。国とは国家のことではありません。国とは people、人々のことです。国を愛する心とは、自分を愛するように、目の前にいる他者を愛することだと、私は信じています。『自分自身を愛するように、なんじ隣人を愛せよ』と。型通りでなくてもいい、歩みが遅くてもいい、気骨ある者も大いに結構。良いものは良い。しかし、己のために他者を排除する者は、私は断固として許さない。我が同志社は、いかなる生徒も決して辞めさせません。それには、あなたたちも含まれています。その信念がある限り、私が辞めることもありません。どうか、互いを裁くことなく、共に学んで行きましょう」。

新島襄は涙しつつ、学生たちに訴えました。普段穏やかな人柄と言われた新島襄が、人目をはばかりことなく涙を流しながら訴えました。この思いが、熊本バンドの学生たちの心を突き動かし、学校改革の要求は取り下げられました。

新島襄が大切にした

スピリット

この新島襄の言葉には「同志社とはどういうところか」、「キリスト教によって立てられている学校の意義とはどういうものか」ということが語られています。新島襄の涙にのせて語られた「自分自身を愛するように、なんじ隣人を愛せよ」の部分が「隣人を自分のように愛しなさい」との聖書の言葉ですが、後に続く「型通りでなくてもいい、歩みが遅くてもいい、気骨ある者も大いに結構。良いものは良い。しかし、己のために他者を排除する者は、私は断固として許さない」は同志社の教育精神であると同時に「自分自身を愛するように、なんじ隣人を愛せよ」とイエスさまが語られた愛の、新島襄が思い描く具体的な中身となります。

あの時、新島襄の涙に触れた熊本バンドの学生たちは、その後、多くの人々にイエスさまの愛を表していく者とされました。金森通倫、海老名弾正、小崎弘道、宮川経輝らは牧師として、教会や学校に於いてイエスさまの愛を伝えていき、徳富蘇峰はジャーナリストとして、弟の徳富蘆花は作家として、やはり新島襄の説いたイエスさまの愛に基づいた活動を続けていきました。

そして、約1世紀半前に新島襄が大切にしたスピリットが、その後の同志社でも語られています。その愛に触れ、愛を身に纏い同志社を巣立った卒業生たちが、日本全国の、世界中のあらゆる場所で働きを為すことをとおして、イエスさまの愛を表し続けてきました。

この場におります私たち一人ひとりも、この愛の系譜に連なっています。私たちも新島襄の涙の訴え、イエスさまによる愛を携えて、この世に歩み出ていきたいものです。

〔参考文献〕

NHK大河ドラマ「八重の桜」 第37回「過激な転校生」Blu-ray Disc

※奨励時の聖書箇所は「ヨハネによる福音書15章11―17節」でしたが、所収にあたり変更して掲載いたします。

2020年1月8日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録